

「投夷書」原本でみる松陰の西洋学習の姿勢

陶 徳 民

二〇〇二年の秋と二〇〇三年の春、エール大学スターリング記念図書館古文書部でペリーの首席通訳官S・W・ウィリアムズ（一八二一―一八八四、中国名は衛三畏）の家族文書を閲覧する際、下田密航時および下田監禁中の松陰が米側に渡した三通の「投夷書」と出会った。本報告は、松陰の白筆と羅森（一八二一―一八九九、字は向喬、米艦添乗の中国人通訳）の清書によるこれら「投夷書」の原本を画像で示しつつ、鎖国体制および蘭学知識の限界を突破し英米学を直接取り入れようとする松陰の西洋学習の姿勢を検討し、あわせて「国益」と「人権」の間に揺れた米外交のジレンマを考察するものである。

一、下田密航時における「投夷書」について

まず、羅森の清書と推定される漢文の「投夷書」本書には「支那の書を読むに及んで、やや欧羅巴・米理駕の風教を聞知し、乃ち五大洲を周遊せんと欲す」という一文がある。ここで、松陰は己の密航の目的は西洋学習にあるとペリー側にはつきり打ち明けている。実際、彼の目指した密航先もカリフォルニアやワシントンと噂されていたペリー艦隊の出帆地である。当時まだ一流の先進国ではなかった米国を目指したということの裏には、日本を震撼した米国の実情を探索しようとする遣り返しの狙いもあり、「ロシ

アの先主ペートルが和蘭人を師として、遂に和蘭に劣らず、北アメリカ人が英吉利を師として、終に英吉利に勝ち候」(佐久間象山「小寺常之助に贈る」という西洋列強間の優勝劣敗的競争関係に対する認識もあつたようだ。

密航失敗後に、蘭学の師である佐久間象山の勧めで書かれた『幽囚録』では、松陰は「荷蘭の学は大いに世に行はるゝも、露西亞・米利堅・英吉利の書に至りては、まだ善く読む者を聞かず。現今諸国の舶交々吾が邦に至る。吾が邦の人乃ち其の方言を詳かにせずして可ならんや。且つ技芸の流、器械の制、諸国各々新法妙思あり、荷蘭の訳撰を経て来るものも亦以て其の概を觀るべし。然れども何ぞ各々其の国の書に就きて之れを求むるに若かんや。今宜しく俊才を各国に遣はして、其の国の書を購ひ、其の學術を求めしめ、因つて其の人を立てて学校の師員と為すべし」という主張を打ち出した。鎖国体制および蘭学知識の限界を突破し英米学を直接取り入れようとする松陰の西洋学習の姿勢を示す肝腎な史料と言える。蘭学から英米学への転換を象徴する事例として、従来、開港直後における福沢諭吉の横浜市街地散歩の感想がよく取り上げられている。すなわち蘭学優等生の福沢は当時横浜に殺到する外国会社の英字看板が全然読めず、一種のショックを受けたため、英学への取組を決意したのである。しかし、福沢のケースよ

り五年も早い松陰の下田密航こそが日本における蘭学から英米学への転換を見事に象徴する最初の事例と見てよいのではないだろうか。

漢文の「投夷書」本書のほか、米側に密航決行時の応接方法を指示する候文の添書もあつた。薄い和紙に書かれ、松陰の墨蹟の特徴がよく出ている。漢字に片仮名のルビを施しているという点で幕末の文書としては珍しいもので、ぜひともペリー側に理解してもらいたいという松陰の気持ち滲みでていると言える。ウイリアムズはこの文書全文は読めなかったが、文中のルビから松陰の偽名である「瓜中万二」と従者の金子重輔の偽名である「市木公太」の読み方を知り、漢文の「投夷書」本書を英訳する際に両者の署名を英字で表記することができた。但し、金子の偽名中の「市」という字のルビに書き損じが入っているため、「チ」は「サ」のように見える。したがって、ウイリアムズの英訳ではこの偽名中の苗字は Ichigi ではなく、Isagi となつてしまっている。

二、下田監禁中における第二の「投夷書」について

ウイリアムズの『ペリー日本遠征隨行日記』の自筆本の裏背表紙に、第二の「投夷書」ともいえるものが貼り付けられ



松陰による第二の「投夷書」(約14cm×約19cm) トップの余白におけるS・W・ウィリアムズの英字メモは次のような内容である。“For the incident connected with this paper, see Spaulding's *Japan*, p. 283, where our translation is inserted.”(文中のSpauldingはSpaldingの誤り)

ている。それは密航失敗後、下田の平滑獄に監禁中の松陰が、偶々訪ねてきた米艦の外科医に渡した一枚の板切れに書かれている漢文の写しである。板切れ自体は現存しないように、漢文の清書者はやはり羅森だと見られる。白文のテキストに筆者なりの訓点を施してみると、次のようになる。

英雄失意、比跡盜賊。面縛就捕、幽囚累日。
村長里正、倨敖相待、其厄亦甚矣。雖然、
俯仰無愧、可以見英雄之為英雄也。
以周遊六十國為未足、欲適歷五大洲、
是吾儕曩心事也。今一旦失計、陷於半
間之室、食息坐臥、不得少出範圍。泣
則近痴、笑則近黠、嗚呼、黙々而已矣。

ここでは、五大洲周遊の意志を再度表明すると同時に、悲惨な監禁状態を嘆いている。当初、和親条約締結直後の米日関係のトラブルを避けたいというペリーの意思を汲み取り、「横浜ニテ米利堅大將ト林大頭ト、米利堅ノ天下ト日本ノ天下トノ事ヲ約束ス、故ニ私ニ君ノ請ヲ諾シ難シ」(吉田松陰「回顧録」という理由でポーハタン号に登った松陰と金子の密航嘆願を拒否したウィリアムズは、ここに来て、ペリーの指示を受けて平滑獄を訪ね、二人を入れていた檻は長さ約二メートル、幅〇・九メートル、高さ一・四メートルという狭苦しい空間を実測した。アメリカ議会の公式文書『ペリー提督日本遠征記』によれば、その後、ペリー側は松陰の案件に積極的に関与しはじめ、斬首のような極刑は処しないという日本側の承諾を得たという(その承諾は、幕府レベルのものなのか、それとも現地役人のものなのかは不明である)。松陰密航一件への対処をめぐって国益優先か人権優先かの選択に悩まされていた米外交のジレンマの反映である。イラクを空爆したアメリカ軍が人道主義を誇示するため、わざわざ各国の記者団を招いて、占領下で条件改善されたバグダッド監獄を見学させたこととは一脈相通するものがあると言える(そして、イラク人捕虜虐待の真相が明るみに出た以降、アメリカ軍の人道主義の本質や人種差別の問題も改めて問われることになった)。

第八二号、二〇〇四年四月。

(関西大学教授)

なお、この第二の「投夷書」の内容は従来、『ペリー提督日本遠征記』、ウイリアムズ、『ペリー日本遠征随行日記』およびスパルディング『日本遠征記』などに載せているウイリアムズの英訳、およびこれらの英訳に対する徳富蘇峰以降、二〇〇二年までの約八種類の日本語訳によってすでに知られている。しかし、今回の漢文「原本」の発見によって、英訳や日本語による重訳のなかで誤訳が二箇所あることを確認することができた。まず、「面縛」とは「両手を後ろに縛り面を前に向ける」という意味だが、ウイリアムズは「公衆の面前で捕縛される」と訳している。これは、松陰が実際自首によって囚われたという事実にも合致しない。そして、「可以見英雄之為英雄也」とは、本来、既に自分を英雄視する松陰の豪邁な気概を伝えるものだが、ウイリアムズは「今や英雄たりうるかどうかが立証されるべき時」と未来形で訳している。誤訳と言わねばならない。

関連論考 「下田密航前後における松陰の西洋認識——米国

に残る「投夷書」をめぐる」『環』第一三号、二〇〇三年

五月、「下田獄における第二の「投夷書」——松陰の覚悟に

対するペリー側の共感」『環』第一四号、二〇〇三年七月、

「十九世紀中葉美国対日人権外交的啓示——写在日本開国

一五〇周年之際」(中国語、香港中文大學)『二十一世紀』